

わがまち歴史散歩 街道をあるく（西国街道編）

西国街道は京と西国を結ぶ主要道として位置づけられてきました。かつては外国の使節が太宰府から京へ来る際に通った主要幹線道でもあります。道の起点は京の羅城門辺りで、大山崎・高槻・西宮・須磨浦を経て下関・九州へと接続します。別に「山崎通」とも呼ばれ、大坂を経由せず京と西宮方面をつなぐ最短ルートとして重視されました。



第1図 池田市内街道全体図

（１）左右に諸城を望む（第２図）

天正３年（1575）、薩摩国（現・鹿児島県）の島津家久が西国街道を上って京方面へ旅をしたときの日記（「中書家久公御上京日記」（『神道体系』参詣記））が残されています。天正３年といえば、池田城が廃城になった翌年で、摂津国の大名に上り詰めた荒木村重が、伊丹城を改修して町屋全体を防御施設で囲む有岡城惣構えを整備していたころです。また、茨木城には荒木村次（一説では中川清秀）、高槻城には高山右近が村重の家臣として配置されていました。家久が摂津辺りを歩いたときの記述には、

左方昆陽池の池有り。亦行きて右方に有岡といへる城有り。本は伊丹といへる城也。亦左方に池田といへる城有り。今はわりて捨てられ候。（略）右方に茨木といへる城有り。それより芥川といへるを渡り、亦右方、高槻といへる城有り。

とあります。「わりて捨てられ」とは、城割り、すなわち城を破却して廃城にしたという意味で、池田城の廃城の手掛かりとなる重要な史料です。

さて、この日記によれば、当時、人々は左右に池田や伊丹などの諸城（城跡）を遠目に見ながら西国街道を歩いたことが分かります。興味深いのは、池田・伊丹の城やそれに付随した町屋が、ともに主要街道である西国街道に沿っているのではなく、西国街道から枝分かれした街道沿いにあるということです。これは、池田や伊丹だけではなく、高槻や茨木の城や町屋も同様です。守護城下町や寺内町など領主や寺社勢力のもとで成立した町とは別に、室町・戦国時代以降、多くの町屋が、人が集まる街道沿いに「市」が立ち始めたことに求められることから、西国街道は自由に市を立てることができない「公的」な街道だったのではないかと思います。しかも、在地領主の館である城は町屋に付随するように築かれたため、おのずと西国街道から遠ざかることになりました。現在、旧西国街道に該当する道路が市街地の中心部から離れた場所を通過しているのは、室町、戦国時代の城や町屋が街道から離れた場所に造られたことが一因になっていると思われます。



第２図 西国街道と諸城の位置

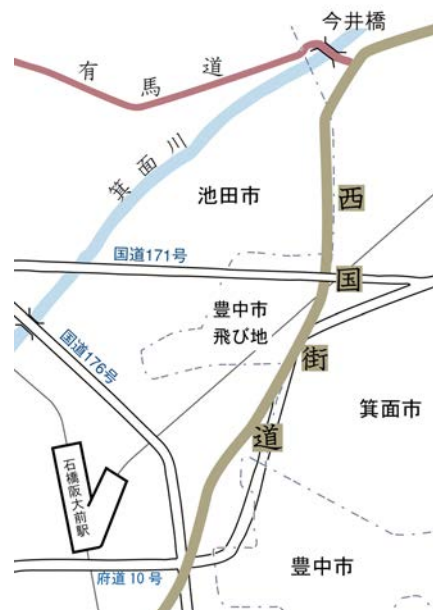
(2) 有馬道との分岐 (第3～5図)

箕面市瀬川2丁目の箕面川に架かる今井橋東詰から南に歩きます。この場所は西国街道と有馬道との分岐にも当たります(第5図A・B)。また、この辺りは南北朝時代に至る合戦の舞台にもなっています。道を南にしばらく行くと池田市と箕面市との市境になり、国道171号線池田バイパスをくぐり、阪急箕面線の踏切を渡ると(第5図C)、国道423号線と合流します(第5図D)。この辺りの西側は豊中市の飛び地(豊中市石橋麻田町)となっています。道はすぐに国道を離れ、右手(南西)の水路沿いの道を進みます(第5図E)。その道沿いの左手には、石仏や五輪塔などが集められた場所(弁財天社)があります(第5図F)。この辺りは以前、「玉坂」と呼ばれており、東側に位置する待兼山とともに昔の歌人によく詠まれています。

豊嶋河原の戦い 鎌倉幕府が崩壊した後、後醍醐天皇が政権を握ります。しかし、政権に不満を持った足利尊氏が反旗を翻し、各地で転戦します。建武3年(1336)2月、「豊嶋河原」で尊氏軍と新田義貞軍との戦いが行われます。この戦いの正確な場所は定かではありませんが、西国街道に程近い、箕面川の河原ではないかともいわれています。この戦いで大敗した尊氏は、九州に逃れますが、すぐに軍勢を整え、同年5月、再び挙兵し、兵庫湊川の戦いで楠木正成を破ります。その知らせを聞いた後醍醐天皇は比叡山、後に吉野に移り、一方、尊氏は光厳上皇を奉じて上洛し、室町幕府を開きました。

玉坂の悲恋 江戸時代の書物『摂津名所図会』の中に次の話があります。昔、玉坂の里の美しい娘に、近くの村の若者が恋をし、通う間にお互い恋仲になりました。ある夜、若者は女の心を確かめようと外で隠れていました。娘はそのことを知らず、明け方まで待てど来ないので、悲しく思い

待ちくれてうつつに見えし面影の
夢もつれなき山風の音



第3図 西国街道(1)



第4図 西国街道(2)

と詠みました。若者はそれを聞き、より一層仲は深まり、人目を恥じずに通うようになりました。そのことが世間の笑い事となり、それを苦にした二人は川に身を投げたという話です。また、この故事から「待ち兼ね」の名が残ったとも記されています。

弁財天社 (第5図F) この場所にある無縁佛供養塔には「安政池 素面池新池」や「地歌二町八反池三つこれでやけたら なんと正傳」と刻まれています。ちなみに素面池は、以前、この辺りにあった池で、池の水を抜くとき、そうめんを食べてしまうようにすると早くなくなることから、この名が付いたともいわれています。



写真に写る道が西国街道です。左の写真の場所では有馬道が西国街道と分岐し写真右手へ続きます（A）。ここより南側で箕面市域から池田市域へと入ります。右の写真は京都方面を向いた時のもので、比較的古代道の痕跡を残している箇所です（B）。



道なりに進むと国道 171 号の高架と阪急箕面線が見えてきます（C）。これらを越え、さらに南へ歩きます（D）。この辺りは豊中市の飛び地になっています。

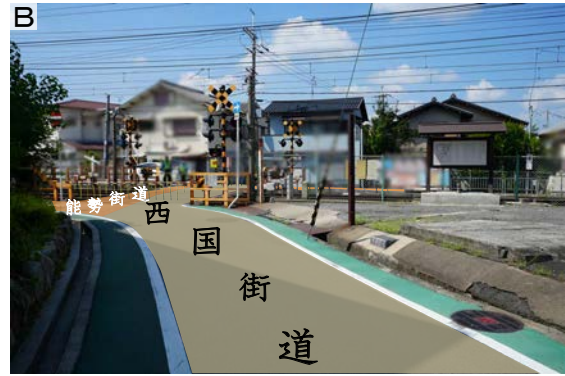


瀬川 5 丁目交差点の歩道橋を越え、しばらく道なりに進むと Y 字路に行き着きます（E）。ここを右へ曲がる道が西国街道です。道を曲がりしばらく進むと左手に弁財天社が見えてきます（F）。

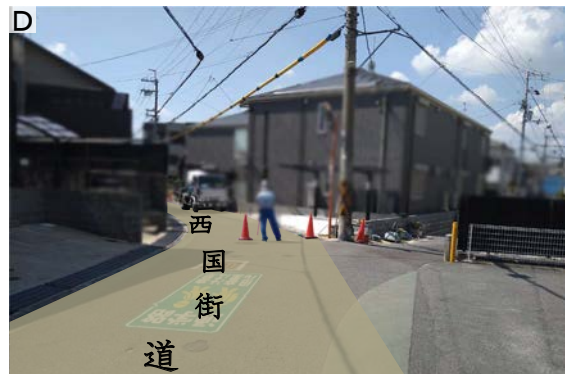


道なりに進むと石橋阪大下交差点に行き着きます。この交差点を左に曲がる道（ここで 176 号線に合流する）が西国街道です（G）。そして、しばらく行くと Y 字路があり、176 号線から枝分かれする道が西国街道です（H）。

第 5 図 西国街道写真（1）



道なりに進むと左手には石橋地蔵堂が見え（A）、さらに道を進むと能勢街道と交差する地点にたどり着きます（B）。かつてここは高札が掲げられた場所でもありました。現在の場所は阪急宝塚線の踏切になっています。



踏切を渡り、道なりに進む道（西方向）が西国街道で、左手の道（南方向）が麻田道、右手の道（北方向）が能勢街道です（C）。西国街道は西へ向かい、右写真の場所を左手に曲がります（D）。この辺りから弥生時代の集落跡が発見された宮の前遺跡の範囲内に入ります。



道なりに進むと、市道東畑住吉線との交差点が見えてきます（E）。この交差点の左手（南側）に亀之森住吉神社があります（F）。



市道東畑住吉線との交差点を横断しさらに西へ向かう道が西国街道です（G）。道なりに歩くと右手に順正寺があります（H）。かつてはここにも高札が掲げられていました。

第6図 西国街道写真（2）



第7図 西国街道 (3)

(3) 能勢街道と交差 (第4～7図)

道をしばらく南に進むと国道171号と国道176号が交じわる石橋阪大下交差点に至ります(第5図G)。信号を渡り、交差点から南へ20mほど進んだ辺りで、南西に延びる道に入ります(第5図H)。道を南に進み左手に石橋地藏堂(第6図A)を過ぎると、阪急電鉄宝塚線の踏切に至ります。ここは大阪から能勢に通じる能勢街道との交差点所であり、江戸時代は法令などを記した高札が掲げられた場所でもありました(第6図B)。踏切から西へ向かうと、街道は石橋1丁目と同4丁目の境となり、しばらく進むと住吉1丁目と同2丁目の境の道になります(第6図C・D)。

「石橋」のいわれ石 この場所の南に位置する石橋南小学校には「石橋のいわれ石」という石が置かれています。この石は旧能勢街道と旧西国街道が交差する西側の小川に架かっていたもので、明治40年ごろまでは幅約3.6m、長さ約1.8mの一枚岩であり、「石橋」の地名はこの石の橋から起こったとされています。また、石の中央にある丸いくぼみは、明治維新の時に三条実美らが失脚し、京から長州へ逃れる途中(七卿落ち)、この石橋の上

で京の方へ折った時にできた馬のひづめの跡であるとも伝えられています。

麻田道(第6図C、第7図) 昔、この辺りから南に位置する麻田村(現豊中市)へ通じる麻田道があったことが、絵図からわかります。江戸時代、石橋を含む西国街道周辺の村々をはじめ、畑・渋谷なども麻田藩青木氏の領地でした。青木氏は1万石余りの外様大名で、麻田村の青木家陣屋(阪急「蛍池」駅の西辺り)に向かう人々が、この麻田道をよく利用したのではないかと思います。

中納言石 住吉1丁目と同2丁目の境にあたる道より北に位置する正光寺の境内には、「中納言(菅原峯嗣)石」「中納言の腰掛石」「夜泣き石」などと呼ばれる石があります。『北豊島村誌』(昭和10年刊)によると、平安時代の初めごろに菅原峯嗣という医学者がいました。峯嗣はこの辺りで隠居生活を送り、付近に薬草園を造りました。中納言石はこの薬草園にありましたが、時を経て、江戸時代に入ると麻田藩主青木氏の望みで、陣屋に移されました。ところが、藩主は悪夢に襲われ石も毎夜「帰りたい、帰りたい」と泣き止まなかったもので、正光寺南方の辻に移されました。その後、毎年2月23日に中納言祭が開かれ、人々が「南無阿弥陀仏」と唱えながら、小石でたたいたそうです。石の周りにへこみがあるのは、そのためだと伝えられています。その後、中納言祭は途絶えたため、石がたたかれることはありません。今では、石は正光寺の境内にひっそりと横たわっています。

(4) 亀之森住吉神社前を通る (第6・8～9図)

住吉1丁目と2丁目の境を西へと歩き、しばらく行くと阪神高速道路池田線に通じる市道東畑住吉線に至り(第6図E)、信号を渡ると住吉神社があります(第6図F)。さらに道なりに150mほど西へ行くと右手に順正寺があります(第6図G・H)。絵図ではここに高札



道なりに歩くと、市道空港北門線との交差点が見えてきます(A)。そこを渡った右手には十二神社があります。西国街道はここで国道176号線により遮断されますが、左写真の左手にある地下道を使うか、空港北門線との交差点を左折し、中国自動車道の高架をくぐることで迂回できます。迂回後、右写真の左手(西)に向かう道が西国街道です(B)。



左の写真が十二神社の入口です(C)。十二神社内には戦争末期に造られた防空壕が残されています(D)。



道なりに歩くと右手に受楽寺が見えてきます(E)。当時、この付近にも高札が掲げられていました。そして、受楽寺を過ぎると五叉路に行き着きます。この五叉路のうち右写真奥に向かう道が西国街道です(F)。このあと西国街道は伊丹市へ入ります。

第8図 西国街道写真(3)

場があることが描かれています。さらに西へ進み、市道空港北門線を越えると右手に十二神社(第8図C)が見えてきます。ここで街道は国道176号線により遮断されますが、現在は十二神社向かいにある地下道を使うか、空港北門線との交差点を左折し、中国自動車道の高架をくぐることで遮断された街道の西側に行くことができます(第8図A)。そして、地下道出口から15mほど進み、左へ曲がると街道へ戻ります(第8図B)。そこから200mほど進むと右手に受楽寺があります(第8図E)。この受楽寺付近にも高札場があることが絵図で確認できます。その後、街道は大阪中央環状線の高架をくぐり伊丹市へと入っていきます。

亀之森住吉神社(第6図F) 神社は祭神を底筒男命・中筒男命・表筒男命(住吉三神)と神功皇后とし、麻田藩の藩社でした。住吉三神は海の神・航海の神として信仰がありますが、



第9図 西国街道（4）

神社の位置が西国街道に接し、近年では阪神高速道路、中国自動車道、大阪国際空港が近くにあるため、陸・海・空の航行の安全を守護する神社としても信仰があるようです。また、神社には文化3年（1806）と嘉永元年（1848）奉納の算額が2面あります（ともに市指定文化財）。そのうち文化3年に奉納された算額は大阪府内で最も古いものです。

算額 日本独特の数学である和算を学ぶ者が、自ら考えた問題とその解答を

一種の絵馬にしたもので、描かれる問題は幾何学の問題が多くなっています。本来、難問が解けた際に神仏の加護に感謝し、今後の研究の進捗を祈って奉納するものでしたが、研究発表や流派の宣伝を目的に掲げるようになります。

麻田銀札取替所 亀之森住吉神社東側の街道沿いには江戸時代麻田藩の「麻田銀札取替所」があったことが昔の絵図からわかります。銀札などの藩札は各藩が発行する紙幣のようなもので、藩の財政難や貨幣不足を補うために発行されました。「麻田銀札取替所」は銀札を買ったり、正貨と引き替えたりする場で、藩自らが設置したものです。藩札はその藩内のみの流通が原則でしたが、藩外でも流通し、麻田藩の銀札も池田・伊丹・多田、遠くは灘でも使われていたようです。

十二神社の防空壕（第8図C・D） 十二神社の「十二」の名称は、天神七代と地神五代をあわせてまつることからついたとされています。また、西国街道を行く参勤交代の大名が馬を休ませたと伝わることから古くは駒の森と呼ばれていました。その境内北側には防空壕跡が残っています。防空壕の大きさは長さ10m、幅3～4m、高さ2mほどのコンクリート製で30人程度が避難できたようです。昭和20年（1945）4月に大阪府からの指示を受け、造られたものとは異なり、昭和18年（1943）に周辺住民によって造られたとようです。十二神社内防空壕の他にも池田市域には多数造られました。平成7年（1995）、戦争の悲惨さを後世に伝えるため、戦後50周年の記念碑が設置されました。

伝承弁慶の泉 受楽寺の北側にあり、市の指定史跡となっています。源義経が尼崎方面へ逃れる途中、義経と弁慶がのどの渇きを潤したと伝えられています。この伝承が本当にあったことなのかはさておき、付近一帯の灌漑用水として重要な役割を果たしていた泉であることは間違いありません。